

||||| プロジェクト研究班報告3 |||||

「松村謙三関係文書」の発掘と
シンポジウム「近代化過程における
東アジア三国の相互認識」への参加を振り返って

武田 知己

筆者は、2007年9月10日、11日の2日間に亘って、南開大学と大東文化大学との共催となる国際シンポジウム「近代化過程における東アジア三国の相互認識」に参加した。このシンポジウムで筆者が報告した「戦前・戦後の松村謙三の中国訪問とその周辺—ある日中提携論の連続と変化—」は、今年度の新しい試みである「プロジェクト方式」の企画の一つとして、国際比較政治研究所からの援助を受けて調査準備がなされた。実はそれ以前にも同じく国際比較政治研究所からの援助で一度調査をしており、国際比較政治研究所の研究費で都合二回の調査を行っている。この援助を受けた富山県福光町の松村家での史料調査が出来なかったら、この報告は完成しなかった。だからこの報告には特別の思い入れがある。そのことを少し書いてみたい。

筆者が、松村謙三の個人文書に関心を持ち、アプローチを始めたのは1999年のことである。まだ筆者が大学院の博士課程のことであり、大東文化大学とのご縁が出来る前のことだ。その頃、筆者は、『重光葵と戦後政治』（吉川弘文館、2002年）として刊行されることになる博士論文の執筆を始めており、戦後の改進黨総裁時代の重光を描くために、幹事長を務めた松村の日記がないものかと探していたのであった。

日本にいて日本政治の研究をしていると個人蔵の原資料（日記や書簡）を発掘して研究に利用するという方法がとれる。筆者はこの手法を好んで用いているが、1999年の段階では、松村文書には手が届かず、代わりに小楠正雄という報知新聞の記者だった人物が持っていた個人史料を入手することができた。「新党結成関係綴」と題されたもので、後の改進黨に繋がる新党の諸資料であった。小楠氏は、松村の腹心と言ってよい人物で、後に櫻田会の理事長ともなった。同会理事の鈴木哲夫氏（元共同通信記者）からそのコピーをお借りし、ありがたく博士論文で利用させていただき、2000年に論文をとりあえず書き上げた。

それから二年後2002年の2月、処女作出版の記念を込めて、科研費を利用して、当時慶応大学の院生であった友人と二人で初めて富山県福光町の松村記念館を訪れた。記念館で松村家の遺族を紹介していただき、飛び込みで地元の薬局（そこが松村の実家だった）を訪れた。当主の松村寿氏は突然の来訪にも快く接待してくださり、一通りのお話をお聞かせ下さった。史料はたくさんあるが、雪の中に閉じ込められて見られない、とのお話であった。研究者の都合で無理やり史料を見せてもらっても相手方にはただ迷惑になるばかりである。このときは後ろ髪を引かれる思いで福光を後にしたが、史料もあるのならば、次の課題は松村研究だと心に決めていた。

その翌年、2003年の暮れに、突然櫻田会の鈴木氏から手紙を貰った。松村の文書を整理したいから是非手伝ってくれとのことだった。お世話になっている伊藤隆東大名誉教授の推薦だという。私は2004年春からの大東文化大学への着任を控えていたのだが、喜んで協力することにした。その年の暮れに、一年かけて、とりあえずの仮目録を作成した。彼の戦後の史料はほとんど残っていなかったし、日記の記述も極わずかであったが、協力してくれた三人の優秀な女性（慶応と学習院の院生達。奇しくも三人の名前は全て「さやか」さんであった）の協力で整理は予想外に早く進んだ。彼女達も、神奈川県庁、宝塚、IT企業へと次々に就職した。とりあえず、研究会は解散し、史料は不足しているが、それが分かっただけでも収穫だったと思った。これで筆者の松村研究の準備も整ったと思って少しほっとしていた。

ところが、松村史料発掘の第二弾はここからだった。一応の整理を終えて作成した仮目録を松村家に送ったところ、実は未整理の書簡などが大量にあるというのである。大東に着任した私は、国際比較政治研究所の出張費を用いて、福光に行くことを考えた。

実際に行ってみると、そこには大量の未公開の書簡と演説原稿などが薬用の大き目のダンボール5つ分にびっしりと入っていた。これではとても整理しきれないと判断し、同じ年の夏に大東の特別研究費を用いて、三日間の史料整理を行った。その時同行してくれた鹿谷雄一氏（本研究所副研究員）と二人で仮目録を作成するが、全てを目録にとることは出来なかった。

しかし、その時に重要な書簡がいくつもあることを確認した。明治時代、北陸には「越中改進黨」と呼ばれた極めて重要な地域政党が存在した。松村家は越中改進黨の有力な支持者であり、松村謙三の祖父と父に宛てた島田孝之の書簡が数通発見できた。島田が当時の中央の政情を憂い、自由党左派との対決を企図する書簡などがそこに含まれる。更に、若き日の石橋湛山からの書簡もあった。挨拶程度のものだが、松村の従兄と早稲田の友人であったらしい。更に面白かったのは永井柳太郎からの謙三宛書簡であった。永井柳太郎の個人文書は全て空襲で焼かれて殆ど残っていない。永井の足跡を知る貴重な文献となった『永井柳太郎』伝の伝記編纂会の委員長は松村が務めているから、二人の関係は密接だったのだろう。松村家に残された永井の書簡は、大正期のものが殆どだが、それらは書簡は、二人の親密な関係をよく表現していて、整理を忘れて夢中になって読んだりした。

そんなときに、このシンポジウムの話が出てきたのである。是非松村のことを報告しよう。出来れば日中関係に関するものにして、しかも未公開の資料を用いてやろうと決めた。そして、今年度もう一度出張費を貰い、また福光を訪れて2日間を過ごし、最終的な報告原稿を纏め上げた。

このシンポジウムは、天津市にある南開大学が国際交流基金の援助を受けて日本の主要な大学と数年に亘り共催してきた一連のシリーズの最後を飾るものであった。日本、中国、韓国、台湾の20に及ぶ大学・研究所から参加者100名近くの盛況で、その間、それぞれの専門分野ごとの個人的交流も活発であった。私事で恐縮だが、筆者は丁度15年前に、安徽省蕪湖市に語学留学をして以来、初めての中国訪問であったから、感慨もひとしおだった。

大東文化大学からは7人の報告者が揃った。嘗て、メディアスタディグループで一緒だった神谷昌史氏（現吉林農業大学。本研究所副研究員）を入れれば8人になる。それぞれ分野が異なるが、私と同じ歴史系は私を入れて4人だった。

私は、松村の戦前の書簡と演説原稿（それはまさに本研究所の研究費を利用して出来た成果である）を用いた報告をおこなった。数人からの質問もあり、受け答えに苦労した。通訳の学生（大学院生だろう）には本当に感心した。こんな場面で場数を踏めば、きっと優れた通訳となるだろうと思ったりした。

報告原稿は、南開大学が作成した冊子に載っている。今年中国語で公刊されるらしい。日本語での原稿も今年度の内にとっていたが、2007年12月に刊行された『重光葵・外交意見書集』第二巻（現代史料出版、2007年）の準備に追われ、時間を割くことが出来なかった。考えてみれば、これも一部で国際比較政治研究所の海外出張費を利用した研究成果である。この本についても書いてみたいが、紙幅がいよいよ尽きてしまったようだ。学内の研究所改革が進められる中、研究意欲のある者にはかなり使い易い資金、手段を整えて下さるこの素晴らしい研究環境が是非とも維持・確保されるよう期待して筆を置きたい。

(2008年1月6日脱稿)